

甲戌年十二月一日發行
第...一〇八號(每月一週)...

子鹿原

12月号

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 その十五

靈 峰 へ 柏 手 ふ た つ 秋 の こ ゑ
障 子 沈 ぶ 棧 の 疼 き は 母 の こ ゑ
爪 あ と の 長 き ひ と す ぢ 障 子 貼 る
芒 野 の 入 口 へ 息 と と の へ る
深 入 り て 芒 の 風 を 抱 い て を り
あ の 貌 の 何^い 処^ず に 在 す 瓢 棚



秋の灯の揺らぎに蒼む終列車
君の名はと問へば八千草囃し立つ
柚子の香や記憶の渦の華やげり
居留守よし応対もよし鴟日和
空中の利権捕らへる殿様ばつた
顧る坂をどんどん秋日落つ
冬近し四条通りに縫ひ包み
冬仕度鍛へ難きは股関節

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

露むぐら（系露忌三句）

一 齣 の 想 ひ を 溜 め し 露 む ぐ ら

秋 雲 の 再 へ 流 る る 風 の 道

名 残 月 鐘 の み ち び く 徑 を ゆ く

— 追 懐 — （その二十五）

冬 蝶 に 一 念 ある も 愛 は 哀
〔平成十一年作〕

年 輪 の 杉 の 私 語 聴 き 冬 に 入 る
〔 “ ” 〕



松本 鷹根

米 寿

己が彩風に求めて秋の蝶

剃り跡を撫づる朝風小鳥来る

石に坐す思案木の実は落ちて撥ぬ

潦跨ぎて秋を惜しむ歩に

稔り田の風に米寿の背を正す

近 詠



塩貝 朱千

峠越ゆ

新涼や師碑に逢ふため峠越ゆ

飛び石を跳ばねば秋の水掬へず

澄む水に澄む水を足す比良山麓

落鮎や街道にあるおとり店

野地蔵のしのび笑ひか風すすき

英華採集

木下闇古ぶ石碑の謀議かな

豊 中 牧 原 嘉 子

石碑に刻まれていてる文字は何と彫られているのであろうか？何やら戦国時代、明治維新等に関わる血なまぐさい歴史の雰囲気「謀議」の二文字に出ており、石碑の古さもその効果を上げています。それに拍車をかけるように季語の「木下闇」が、怪しげに置かれている。対象に踏み込んで独自の詩的世界へと転換している。

新じやがやでこぼこ全て受け入れる

高 槻 杉 井 真由美

馬鈴薯の形から、愛嬌さも含めて人の顔に喩えられる（じゃがいものような顔）ことがよくある。憎めない気持ちがあるからそう言われているのであろうが、言われた人もそう露骨にも反論せずむしろ好意的に捉えている。掲句は、人としてあり得たい人間像を願望として表現している。的確な季語を配したことで俳味のある作品となった。

鳳仙花三人寄れば語尾弾け

枚 方 植 田 秀 子

女三人寄れば姦しいと言われるが、掲句の三人も女性であらう。たとえ二人であつても話の接ぎ穂が切れる事はない。三人ともなると言葉の語尾を察して果てしなく続く。その繋がりが「語尾弾け」である。鳳仙花が弾けるところからの季語の幹旋ではあるが、「つま紅」と言われるように女性へのイメージが出来上がることになる。



露の人 藤岡紫水

鳥渡る農夫暮色に腰伸ばす
 鶏頭の残花くれなゐ学徒の碑
 しとどなる露踏む我も露の人
 東山見えぬ雨の十三夜
 神杉に銀の糸ひく秋時雨

懐手 沼田巴字

短日の庭草にあるひかりかな
 古暦月日はけぶるものとして
 大坂で終へし旅路や小夜時雨
 分身のわが影と酌むおでん酒
 捨つべきは捨つるに如かず懐手

巾道 丸井巴水

ひぐらしを聴き少年の儘である
 嫌はれて憎めぬ秋の蜂が去る
 秋深く中道それぬ余生旅
 二歩三步遅れ始める枯れ野坂
 晩秋は聞こゆる音のみな尖り

黒揚羽 伊藤希眸

透明な躰造りに鮎を食む
 命一つ長梅雨やつと大倭去る
 黒揚羽蜜吸ふときも羽搏きぬ
 草原の風の連弾馬群るる
 沈黙の蟬蔵壁の崩れそむ

秋はじめ 北川孝子

嵯峨慕情どこに触れても秋はじめ
 やはらかに嵯峨の語り部小鳥来る
 遠かなかなほろほろ二の腕さみしかり
 話題また昭和に戻り酷暑なる
 秋めきし草濡れている余情かな

無音 直江裕子

去り際に振りかへる癖秋に入る
 泳ぐかな競ふことなどもう忘れ
 まだ青き蝉解けゆく無音界
 千台の車と欺瞞灼けてゐる
 いつまでもここにゐるから白木櫃



鬼灯 高木晶子

鬼灯やこれから老いてゆくと
 夕方は鼻つ柱の日焼けして
 蚊遣香尽きてこの世に止まれり
 終戦日どこにも合はぬ鍵の束
 つくつくし啼いてゐる間を雌伏とす

向上心 木戸渥子

ががんぼや骨密度てふ怖きもの
 向上心ありすぎ向日葵塀を越す
 お互ひに嘘をいくつか日雷
 高飛び込み見る鯉呼吸してしまふ
 砵雨去りてサラダのやうな東山

複眼 奥田筆子

複眼に迷ひの生じ鬼やんま
 西日濃しそ動かせぬものばかり
 キウイの実だれでも渦をもつて
 不図たまるポイントカード棗の実
 前世よりさらはれもどり桜員

赤のまま 井上菜摘手

並ぶのはきらひ八月を曲る
 行く先の何処かもしらず蟻の列
 うかうかと姉の背越ゆる赤のまま
 迷子放送冷房がよく効いて
 豆腐二丁買ふためだけの白日傘





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

木下闇古ぶ石碑の謀議かな

豊中 牧原 嘉子

夏休み早瀬の子等のはかりごと

約束の針千本や遠花火

ひぐらしと風の径ゆく寺領林

橋寺のひと日見届く酔芙蓉

山の日や越えたき嶺に漢雲

ゆく夏や子の武勇伝二つ三つ

アリゾナ 伊吹 之博

新じゃがやでこぼこ全て受け入れる

高槻 杉井真由美

正論の溶けてゆくさま炎暑かな

アリゾナの秋万天にジエツト便

ゴツホの眼炎ゆる己れを見つめをり

夕風ぎて窓一杯の大きな絵

オハイオ 水谷 直子

炎ゆる島怒り哀しみまだ続く

夏めきて婿の好物糠漬を

鳳仙花三人寄れば語尾弾け

枚方 植田 秀子

等分と言ふは難し西瓜切る

若葉映ゆうすむらさきの西の空
卒業や蛍の光遠き日よ

葉と競ひ色づきはじむななかまど
山門に着くまでの縁みちをしへ
一人居の鏡の奥や夜の秋

札 幌 野村 鞆枝

端居して愚痴聞く側にまはりけり

図書館の窓陰にして夏木立

酒 田 藤波 松山

人は皆悩みかかへて夏木立

新盆や道新らしき姪の家

赤蜻蛉こどもの声に居るを知る

仏花千草の花は狭庭から

渋 川 東 秋茄子

古道を千草の花の賑はひて

日短か家事二つ減る寂しさよ

バス停で時間気にする日短か

三伏や友の入院また伸びて

さいたま 神田 惣介

父の歳越して傘寿や大文字

孫集ひ鰻并取りて大パーティー

辞書を師に原書に挑む熱帯夜

この老いの誇り長十郎を剥く

蟻踏んでしまひし赤きスニーカー

千 葉 高野 春子

採血の血のはればれとして九月

次に会ふ瞬間までの捕虫網

夏の合宿カレライスは紙皿に

布川 孝子

山の日や一步一步と駅の階

渡し舟閉ぢて灯籠寂びて建つ
帰宅早や背にまるまる汗のシヤツ
はたた神雨足一気に連れて来る

松 戸 岡山 敦子

万人の御霊敬ふ四方花火

こだはりの珈琲窓に今朝の秋

炎天や帽子を深くいざ出陣

入山を解かれし処草紅葉

習志野 上野 紫泉

主役にはなれない酸橘コーヒー出る

厄日過ぐ肋骨の浮く羅漢仏

十二神将その一将の秋深む

鉦打てば百合のひとつひらはらり落つ

船 橋 元橋 孝之

雨月夜ひとりひとりの隠しごと

月天心ふと人のありし日を

甦る青き乳房の紅珊瑚

お下りの浴衣を着たる反抗期

金子 正道

炎天を来て検診の血を抜かる

窓越しに手を振り合うて夏終る

絶え間なく鳴る改札機秋暑し

飯を炊く匂ひの中や秋の風

東 京 野中 圭子

夏祭りお品書きあり頂きぬ

旅予定台風行方一喜一憂

リオ五輪過ぎて色なき風の音